

被服も熱乾でシラミの消毒済みの物を着ていたなど、運がよかつたなあと思います。

しかし、希望のない極限の生活を強いられたので、帰国して、いかなる困難も苦にならない、しない。たとえ苦しくとも当時は思い起こせば、腹が減れば食べれば腹を満たし、夜は昼、ふとんの上で安眠でき、努力すれば報われる。これにまさる幸せなしの気持ちを持ち続け、それが今でも生活の信条、気持ちの励ましです。

思い出のその時代

新潟県 三田 敏 男

大正十三年十月十五日、現在の新潟県岩船郡荒川町長政、農業、主として稲作農家の次男として生まれ、両親と兄弟七人。兄はソ連タイセツト病院で昭和二十二年二月三日死亡。

私たちの子供時代は、義務教育六カ年。幸い私は高

小卒。

時は日支事変中にて軍国化時代、当然青年学校にて軍人教育を受ける。特に日米開戦以来、男子は次々に召集令状にて出征する。私も当然、現役兵証書を受け、入営を命ぜられる。入営部隊、満州第二二九部隊楓隊、日時、昭和二十年二月十日午前十時、大阪府津村別院集合。

二月十四日博多港出港、釜山上陸。目指すは東滿綏省綏陽県綏芬河。兵科は砲兵、三八式十五センチ榴弾砲、一個中隊四門、初年兵は四十五名。その教育中五月、作戰命令を受け第一二四師団砲兵連隊に。さらに六月野砲兵第一一六連隊に改編となり、綏西の兵舎に若干の馬と馬の手入れに当たる十名くらいが残留、本隊は穆稜に陣地構築中、八月九日早朝より敵機来襲。日増しに激しい攻撃、特に敵戦闘機の機銃掃射。中隊長榑田少尉、交戦状態に入る命令。

いよいよ決戦、即戦闘態勢。中隊は十五センチ榴弾砲三門をほぼ三角形に砲列布置し、私は第二小隊第三分隊、小隊長小松見習士官、分隊長松村伍長。もはや

戦闘は時間の問題、敵機の攻撃にさらされながら、砲弾の集積準備や、砲には偽装網を張り決死の作業。夜は至るところに敵の照明弾が番号弾が打ち上げられ、真昼のように照らされる。いよいよ我が中隊決死の戦闘開始。時八月十二日、夜明けとともにソ連軍の戦車が行動開始、これに対して我が砲兵部隊は先を競って砲撃、両軍の壮烈な砲撃戦が展開された。

初めての戦闘、無我夢中で戦った。このとき、ソ連軍の戦車約五十両は穆稜から牡丹江へ前進できずとの報告を聞き、まずまずの戦果であり、日本軍強しとの一人満足。

ところが、翌日ソ連軍は態勢を立て直して戦車二百両と砲兵部隊、それに陸軍部隊が加わってくるのが肉眼で確認できた。死は覚悟、激しい戦闘となる。正午ころ、我が第二分隊、砲とともに全滅との知らせ。ますます砲撃が激しく弾着も四、五メートル、砂煙が上がる。砲弾の続く限り撃ち続ける。

太陽が西へ傾きかけたころ、十名ずつのソ連兵が我が陣地方向に前進を発見。我が分隊は直ちに敵狙撃兵

に砲撃するも、敵は重機関銃に火炎放射器。敵をせん滅できず、最後の零距離射撃で応戦するも既に二、三百メートル、友軍の歩兵部隊の姿もなし。いつ死ぬか、そののみ。戦友が大腿部貫通、首に、腕に、次々に倒れる。まさに弾雨の音ばかり。

砲の生命である照準用眼鏡が破壊され、射撃不能。日が暮れて時計の針もわからない。第一分隊にたどり着き、亡き戦友に別れて山中へ姿を消し、生存者二十数名、戦死者百数人と記憶している。尊い戦友を数多く失い、武器も食糧もなく、着のみ着のままの悲惨な撤退となり、以後、山また山を越え、ソ連軍と再三遭遇し、時には攻撃されて負傷者、戦死者も出る。山中、至るところで友軍同士が会っては別れ、また会いながら後退が続く。九月も末ごろになれば寒さが加わり、露営もできなく、それに食糧もその日その日の苦難のわざ。もちろん米など見ることもさえない。

無念ながら、九月三十日、敦化付近の朝鮮部落においてついにソ連軍の武装解除を受ける。軍隊当時の戦友は福島県出身の斉藤久男君と二人のみ。一晚は学校

で、翌日から約百二十名くらいが行軍させられ、教化の飛行場に収容される。約二十日間。その後、行軍と貨物自動車でソ連領へ。以後三カ所移動、昭和二十一年の暮れころトウキョウ・ダモイを信じて貨物車に。ダモイどころか、イズベストコーワヤ地区ヤクディニヤ三〇八収容所へ。人員は約五百人、作業は鉄道敷設、道路工事、伐採、製材等。

収容所生活は、シラミ、南京虫、寒さ、食糧不足で、人間社会に通用、想像できない生活。毎日尊い犠牲者が出た事実。また、厳しいノルマが課せられ、これらはその経験者でなければ語ることができない。

昭和二十四年六月中旬ころ、現場作業中ダモイの知らせ。本当かうそか半信半疑。直ちに入浴、その日の夕方、貨物車にてヤクディニヤよさらば。汽車で六、七日くらいと記憶している、海が見えた。涙が出る。忘れることができない六月三十日、岸壁に日の丸の日本船「信濃丸」と確認。ああ、これで助かった。七月二日、舞鶴港上陸。この感激は一生忘れることができない。

戦争経験、抑留生活四年半、まさに死のふちの人生経験。それだけに、どんな環境にも生きる希望を持つ、また生涯に大きなプラスもあるであろう。

シベリア抑留記

新潟県 金田市 郎

大正十四年十一月七日、新潟県北蒲原郡松ヶ崎村大字松ヶ崎字山ノ上三〇二八番地に出生す。

浜松尋常小学校へ入校、四年生の二学期より新潟市入舟小学校へ転入、卒業。新潟市二葉尋常高等小学校へ入学、卒業す。卒業後、東北電力(株)工具養成所で一年間の教育を修了し、入社する。

父は北海道―新潟間を航海する船長、母は家事専業主婦であり、弟二人、妹一人である。

昭和二十年一月十八日、新発田東部二十三部隊に現役入隊す。軍装については、やや軍人らしい服装だった。ややとは、戦闘帽は地方での中折れの改造したもの